文化による関西・大阪の活性化とポストコロナ時代の新たな取り組み

協会設立40周年にあたって

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
理事長　崎元利樹

関西・大阪21世紀協会は1982年4月に設立されました。今年で設立から40年になります。節目の年にあたり、皆さま方からの長年にわたるご支援に改めて御礼申し上げるとともに、当協会が設立された経緯とこれまでの歴史をご紹介しながら、これからの抱負を述べたいと思います。

ある夏の日

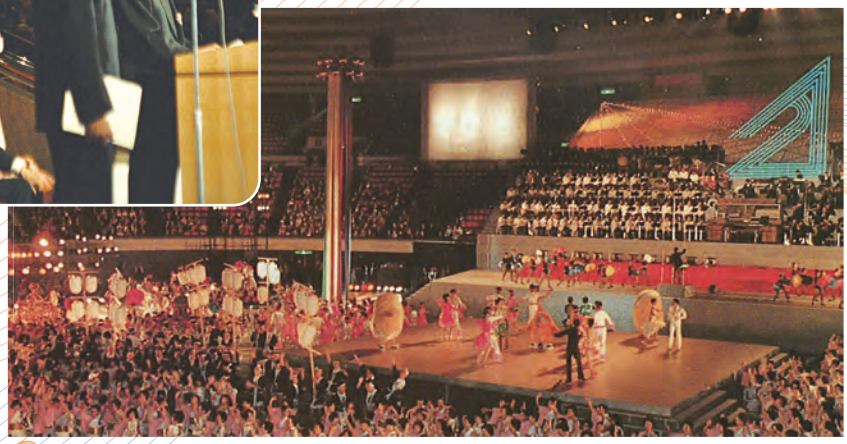
協会が設立される3年前、1979年のある夏の日、大阪・中之島の「サントリー文化財団」のロビーで、サントリーの当時の佐治敬三社長と70年万博の功労者でもあった作家の堺屋太一氏が交わした会話が始まりでした。

70年万博が終わって10年近くが経ち、この頃の大阪は経済が停滞して地盤沈下に歯止めがかからない状況になっていました。こうした状況を憂えた堺屋氏は、かねてより温めていた一つのアイデアを佐治社長に告げました。4年後に控えていた「大阪築城400年」を機会に大きなイベントを開催して大阪を活気づけたらどうだろうかという提案でした。これを聞いた佐治社長は大賛成でした。話はどんどん広がって最終的には大阪の各界をあげての動きとなり、「大阪21世紀計画」が策定され、1983年秋の「大阪築城400年まつり」と「御堂筋パレード」につながりました。こうした一連の取り組みの推進母

佐治敬三 第3代会長（1993.3〜1999.11）

皇太子明仁親王殿下（現上皇陛下）と美智子妃殿下（現上皇后陛下）ご臨席のもと、松下幸之助会長（右端）が大阪21世紀計画のスタートを宣言（1983年10月8日／大阪城ホール）

堺屋太一氏（1979年当時）



大阪21世紀計画開幕式（1983年10月8日／大阪城ホール）

体として設立されたのが「大阪21世紀協会」です。初代会長には、「経営の神様」といわれた松下幸之助氏が就任したほか、当時の大阪の各界を代表する方々が役員や企画委員に名前を連ね、まさにオール大阪での体制となりました（第3代会長には佐治敬三氏が就任）。

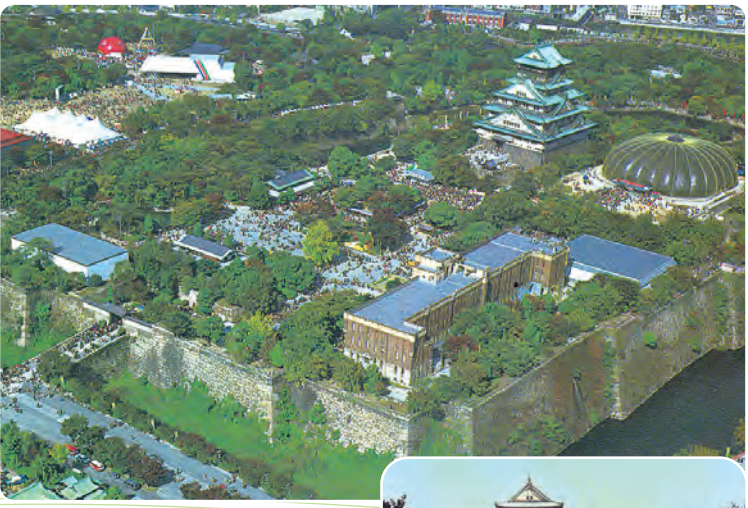
以来、「関西・大阪21世紀協会」（2012年に「大阪21世紀協会」から改組）は、これまで4次にわたるグランドデザインを掲げて文化による大阪の活性化（文化立都）に取り組んでまいりました。その基本的な考えは、古代からの深い歴史を持つ大阪では、経済だけでなく文化に根差した都市としての発展が可能であり、「経済と文化を両輪として大阪の活性化を進める」というものです。

果たしてきた役割

「御堂筋パレード」は、大阪府・市からの補助金が財政再建のために支出困難となり2007年で終わりましたが、多いときには海外からも含めて1万人がパレードに参加し120万人余りの観客で賑わいました。25年間の蓄積は大阪の文化の底上げにつながりました。

大阪に「水の都」としての姿を取り戻した「水都大阪」の取り組みも大きな成果をあげました。「水の都再生」は、かねてから大阪の課題といわれていましたが、21世紀を迎えた2003年、当協会は、この年に策定した第3次グランドデザインで「水都大阪」再生運動の指針となる提言を打ち出し、他の組

大阪城博覧会（1983年10月1日～11月30日／大阪城公園）



第20回御堂筋パレードと「水都再生」をテーマにした当協会フロート（2002年10月13日）

松下幸之助 初代会長（1982.4～1985.1）

水辺に親しむライフスタイルの気運醸成に向け、さまざまな社会実験を行った。（上：天満橋お花見水上カフェ／2007年4月、下：水上音楽パレード／2009年10月・大川八軒家浜周辺にて）

時代に応じたグランドデザインを策定

織や団体等とも連携して運動を牽引しました。その結果、運動は大きな広がりとなり、汚れていた岸辺は散策を楽しめるような景色に変わり、周辺には高層マンションが建ち並ぶなど大きな経済効果も生まれました。

このほか、アーティストの作品の発表機会の創出や大阪の食文化の多面的な情報発信など、これまで行ってきたさまざまな事業は大阪の文化の発展・振興に意義深いものだったと自負しています。

組織の変遷と事業の承継

40年の歴史の中では、事業や組織のありようが変わることもありました。「御堂筋パレード」が終了した時期には、大阪府・市から当協会への職員の出向も終了して組織が小ぶりになりましたが、協会は事業の重点をイベント実施からムーブメント醸成に変えて運営もコンパクトに切り替え、賛助会員の皆さまをはじめ経済界や市民の皆さまの支援に支えられて引き続き「文化立都」の取り組みを進めてまいりました。

また、ここ10年間では、新たな事業の承継などが相次ぎました。2013年には財団法人 上方文化芸能協会から事業を引き継ぎました。長年培われてきた伝統芸能や伝統行事は大阪の歴史的な財産であり、これからもさまざまな形で支援を続けていこうと思います。

2014年には独立行政法人 日本万国博覧会記念機構から「日本万国博覧会記念基金事業」を承継しました。この事業は、70年万博の理念に沿った国際交流事業などに助成を行うもので、これまでに世界中で、およそ4,700件、金額にして194億円の助成をしてきました。70年万博の誇るべきレガシーだと思います。

同じ2014年には、一般社団法人 関西経済同友会の提言を受けて「アーツサポート関西」を立ち上げ、アーティストへの支援を行う助成事業を開始しました。広く市民や企業の皆さまから寄付を募ってアーティストの皆さんに助成をするものです。これまでに210件余り、およそ1億円の助成を行いました。

40年の時の流れの中で、組織としてはスリムになった一方、活動の場は一段と広がっています。

40周年からの新たな取り組み

40年の節目となる2022年からは、これまで以上に次世代に向けた人材育成に取り組んでいきたいと思います。

具体的には、2022年2月に開館した大阪中之島美術館と協力して、若手アーティストの登竜門的な活躍の場となる展覧会「Osaka Directory（おおさか ディレクトリ）」や、小学生にアーティストと触れ合いながらの作品作りを通して豊かな感性や創造力を育んでもらう「学校アートプログラム」を始めました。単なる単年度の事業としてではなく、40周年を記念してスタートさせる新たな継続事業として位置付けています。

また、これまで以上に皆さまからのご支援をお願いするため「HEART & ART（ハート&アート）」と銘打った寄付の募集を進

アートストリーム（2002～2019年）
関西を拠点に活動するアーティストに発表と飛躍の機会を提供

インターナショナル和食フォーラム（2017、2020年）
SDGsのすべてのゴールに深く関わる「食」をテーマに、日本の伝統文化である和食の魅力や現状を発信

アーツサポート関西の立ち上げにあたり開催された「チャリティ・ファンドレイジング・パーティー」には、財界人や文化人、マスコミなど総勢1,650名が参加（2014年4月1日）

季刊誌『やそしま』を発行
（上方文化芸能運営委員会）

今宮神社「十日戎」の奉納行事「宝恵駕籠行列」に協力（上方文化芸能運営委員会）

めています。新型コロナウイルスの感染拡大による行動制限の影響で基礎体力が奪われたアーティストの皆さんを支えて行こうというものです。支援先を自分で選べるクラウドファンディング型の寄付もできるようになりました。関西・大阪から大きく羽ばたくアーティストの応援にご協力いただければ幸いです。

こうした事業に加えて、各種の文化活動に対する後援や、各種団体との連携・橋渡しをする結節点機能の推進なども合わせて、さまざまな取り組みを通して関西・大阪の文化の発展・振興に寄与したいと思っています。

2022年は、関西・大阪21世紀協会の第5次グランドデザインスタートの年でもあります。協会設立以来、数次にわたって掲げてきたグランドデザインは2017年からの第4次が2021年で期間満了となり、新たなグランドデザインを策定しました。第5次グランドデザインでは、コロナ禍によって生み出された新たな動きを、今後の社会にどう反映させていくのかという課題を提起したほか、2025年の大阪・関西万博を行動計画の重要な柱として位置付けています。万博は、関西・大阪の魅力を世界に向けて発信するまたとない機会であり、70年万博のレガシーを引き継ぐ者として、25年万博にも寄与すべき役割があると思っています。70年万博のテーマ「人類の進歩と調和」には、人類の進歩が、これまでさまざまな不調和を招いてきた歴史を振り返り、その反省の上に立って未来の人類には調和的な進歩を託したいという願いが込められていました。世界各地で分断と対立が拡散する現状を前に、今求められているのは寛容と調和の心ではないでしょうか。長い歴史の中で多様性と調和の精神を培ってきた大阪で再び万博が行われることは、極めて意味のあることだと思います。関西・大阪21世紀協会は、さまざまな機会を通して多様性と調和の精神を発信すべく取り組んでまいります。

今後とも皆さま方からのご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

タブレットを使って映像作品を制作（学校アートプログラム）

関西・大阪 21 世紀協会の歩み

第1次 大阪21世紀計画 グランドデザインの基軸	1982～1991	1982　大阪21世紀協会　設立 1983　大阪築城400年まつり、御堂筋パレード 1990　国際花と緑の博覧会
第2次 大阪21世紀計画 新グランドデザイン	1992～2002	1994　関西国際空港開港 1995　阪神・淡路大震災発生
第3次 大阪21世紀計画 グランドデザイン	2003～2016	2008　御堂筋パレード中止　（2007年で終了） 2009　大阪府・市からの職員出向終了 2009　水都大阪シンボルイベント 2012　公益法人認定・名称変更 2013　上方文化芸能協会事業承継 2014　日本万国博覧会記念基金事業承継 2014　アーツサポート関西　創設
第4次 大阪21世紀計画 グランドデザイン	2017～2021	2017　食博覧会大阪 2020　東京オリンピック・パラリンピック　延期 2021　東京オリンピック・パラリンピック　開催 2021　ワールドマスターズゲームズ関西　中止
第5次 大阪21世紀計画 グランドデザイン	2022～2026	**2022　協会設立40周年** 2022　大阪中之島美術館開館 2025　大阪・関西万国博覧会 2025　食博覧会大阪 2027　ワールドマスターズゲームズ関西

『第5次グランドデザイン』は、
関西・大阪21世紀協会のホームページに掲載しています。
https://www.osaka21.or.jp/about/principle_5th_gd.html

設立40周年に寄せて

関西・大阪21世紀協会は、これまでさまざまな分野から多くの方々のご理解・ご協力を得て活動してまいりました。設立40周年にあたり、当協会への温かいご祝辞や貴重なご意見をお寄せいただきました。（掲載は50音順）

桐竹勘十郎氏

文楽人形遣い（人間国宝）
一般社団法人 人形浄瑠璃文楽座　代表理事

妹背山婦女庭訓 お三輪　（撮影：小川知子）

此の度の関西・大阪21世紀協会設立40周年を心よりお喜び申し上げます。私ども人形浄瑠璃文楽座も、協会の活動を通じて、これまで様々なご支援を頂き、若い人達への伝統芸能の普及に多大なご尽力を頂いております。「文楽座」は本年、命名150年目を迎えました。これは「文楽」という名称が初めて劇場の名として使われて150年目で、元祖　竹本義太夫が興した「竹本座」からの芸の系譜は1684年当時から今に続いております。この長い年月の間には、幾多の困難に遭い、その度に多くの人達の助けを受けながら芸の系譜を守って参りました。国の豊かさは経済の力が勝っているだけでは完成しません。我が国の素晴らしい宝物である文化を守り、そして育てる事が豊かな国には不可欠です。その時代時代の人々にサポートされて、途絶えなく続く日本の文化力の為に、未来に向けての関西・大阪21世紀協会の役目は大きく、私達も更に期待するところであります。

五嶋みどり氏

ヴァイオリニスト
認定NPO法人ミュージック・シェアリング 理事長

関西・大阪21世紀協会設立40周年、誠におめでとうございます。

私には、渡米するまでの10年の月日が故郷・大阪であり、20歳になって非営利財団を立ち上げてから訪れる大阪は別世界でした。あの鳥飼大橋河川のすすきに、時空を超えて落ちる雪の粉。東京行きの夜行列車の匂い。それが、今は大阪―梅田駅は立体構造になり、次の万博の話がはずんでいるではありませんか。

でも、みどりの波を湛える琵琶湖から流れる淀川が伝える伝統文化、天下の台所と称されたなみはや、日吉丸が天下を治め外国貿易の拠点をより広く構えたこの大阪に、脈々と受け継がれた人間の性は、日本を下支えする私の故郷の人々の中に波打っているに違いありません。関西・大阪で育まれ受け継がれてきた様々な文化を、貴協会は、長年にわたって発掘・発信されて来ました。私の設立したNPOミュージック・シェアリングが今年30周年を迎えられましたのも貴協会の御蔭であることに心からの感謝を述べるとともに、貴協会が先導となり、船頭となり、末永く関西・大阪の繁栄に寄与されますことを確信し、祝辞とさせていただきます。

©Peter Rigaud c/o Shotview Artists

佐渡 裕氏

指揮者

兵庫県立芸術文化センター芸術監督／トーンキュンストラー管弦楽団音楽監督

©Takashi Iijima

このたび「関西・大阪21世紀協会」が40周年を迎えられたこと誠におめでとうございます。京都の公立学校で今日の基礎となる全ての音楽教育を受けた私は、9歳で大阪万博を経験して「人類の進歩と調和」を夢見て心を震わせ、フェスティバルホールに来日する海外の著名演奏家に憧れ、上方落語に代表される芸能にもどっぷり浸かって青春を過ごしました。

協会が大阪万博の意志を引き継ぎ、記念基金を基に国内外の文化育成助成事業に尽力され、2025年には再び「大阪・関西万博」を通じて関西と大阪の魅力を世界に発信されていくこと、万博アンバサダーを拝命した私としては大変心強く感じています。

代表発起人を務めさせていただいた<アーツサポート関西>事業は、企業と個人の熱い思いを、文化を通じて若い演奏家や新しい創作のエネルギーに直接伝え、支援と交流の循環を生み出していく非常に関西らしい仕組みとして、素晴らしい成果を上げておられます。これからも関西らしさ、大阪らしさを世界に発信し続け、文化の力で市民や企業にも元気を与えるその架け橋としてますます協会が発展されるよう期待いたします。

寺田千代乃氏

アート引越センター株式会社 名誉会長

桂文枝さん（当時上方落語協会会長）と
上方若手噺家グランプリ表彰式にて

貴協会が、40周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。この40年は、大阪、関西そして日本にとって、バブルとその崩壊後の失われたといってよい時代でした。貴協会も、時代の波に翻弄され、政治的、経済的な影響を大きく受け、時には存立の危機ともいえる時期もあったと思います。ただ、大阪・関西の文化の火を消してはいけない、大阪・関西という地域のブランドを何とか向上させていこうという熱い想いを持ったたくさんの方々の支援の下で、40周年を迎えられたことをうれしく思います。

大阪、関西には、大きな文化的ポテンシャルがあることはご存じのとおりですが、文化、アートは発表の場があってこそ人々に広がり、演者やアーティスト達が育ちます。私自身が関わった、アーツサポート関西の中の上方落語という分野では、発表の場の少ない若手噺家がグランプリを競うことで切磋琢磨する姿を拝見し、応援してよかったと心から思っています。

これからも、大阪、関西の文化立都の推進役として協会が中心的な役割を果たしてくれることを、そして、それを皆が民の力で支えて行ってくれることを期待しています。

アーティストが育つ 魅力ある大阪に

大阪中之島美術館 × 関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory
おおさか ディレクトリ

大阪中之島美術館

関西・大阪21世紀協会は、設立40周年記念事業の一環として、大阪中之島美術館との共同企画「Osaka Directory」を今年度3期にわたり開催します。関西・大阪ゆかりの若手アーティストの作品を個展形式で紹介するプロジェクトで、同館での展覧会と併せ、この機会に新進気鋭のアーティストが放つ独創的な世界観とパワーをお楽しみください。

「Osaka Directory 1」
赤鹿麻耶さんの展覧会
（2022年8月6日～9月11日）

若手作家に発表の場を

大阪には、関西圏の美術・芸術大学や写真専門学校などを卒業して活躍を志す、若いアーティストがたくさんいます。しかし、作品を発表する機会も限られていることから、やむなく大阪を離れてしまう作家も少なくありません。

当協会は、実力のある若手アーティストの作品を今年オープンした大阪中之島美術館で紹介し、大阪におけるアートシーンの活性化につなげるとともに、作家たちが国内外へ大きく飛躍するきっかけになればと考えています。さらに、本企画を継続的に行うことで、若手アーティストの目標や登竜門的存在となり、大阪が「アーティストが育ち、活躍する都市」として強く印象付けられることを目指しています。また、2025年大阪・関西万博に向けた取り組みとして、万博のテーマの一つである「いのちを高める」を体現する場とも考えています。

現代アーティストの「名鑑」

プロジェクト名の「Directory（ディレクトリ）」は、英語で「名鑑」、IT用語ではデータを保存するフォルダを意味します。こうした展覧会を重ねることで、関西ゆかりの “アーティスト名鑑” になればとの思いが込められています。

Osaka Directoryでは、大阪中之島美術館が近代・現代美術を中心に展示していることから、現代美術とりわけ現在活躍している若い作家の作品や考え方を紹介します。今年度出展の赤鹿麻耶さん、貴志真生也さん、遠藤薫さんは、若手ながら個展・グループ展など展覧会の出展歴もあり、今後ますますの活躍が期待され、選ばれました。会場の多目的スペースはインスタレーション作品の展示に適しており、アーティストたちの特徴を生かせる点も考慮されました。

菅谷富夫館長（左）と﨑元利樹理事長（右）
（2022年6月15日・記者発表にて）

大阪の美術館として

今年6月15日に同館で開催前の記者発表があり、大阪中之島美術館の菅谷富夫館長は、「大阪の美術館として地域の若い作家の発表の場を作るのは私たちの使命でもあり、こうした取り組みを外部の団体と連携してやっていくのが当館の特徴。発表の場があることで大阪に住む魅力を感じてもらい、大阪の魅力が増すことにつながればいい」と語りました。

また、当協会の﨑元利樹理事長は、「大阪の人は昔から地元に対する愛着や誇りがあり、豊かな文化を育んできた。しかし、大阪の芸術活動を取り巻く現状は十分とはいいにくい。Osaka Directoryを大阪のアート界に大きなうねりを起こすきっかけにするとともに、ここから、才能ある多くの若い作家が世界に羽ばたいて行ってほしい」と期待を寄せました。

Osaka Directory

第１期 赤鹿 麻耶／2022年8月6日（土）～9月11日（日）
第２期 貴志 真生也／2022年11月23日（水・祝）～12月25日（日）
第３期 遠藤 薫／2023年1月20日（金）～2月26日（日）

会　場　大阪中之島美術館 2階 多目的スペース（入場無料/ただしOsaka Directory以外は有料、月曜休館）
主　催　大阪中之島美術館、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
協　賛　サントリーホールディングス株式会社、ロート製薬株式会社、大和証券株式会社、西日本電信電話株式会社、ダイキン工業株式会社、株式会社丹青社

▼▼▼

第１期　2022年8月6日（土）～9月11日（日）

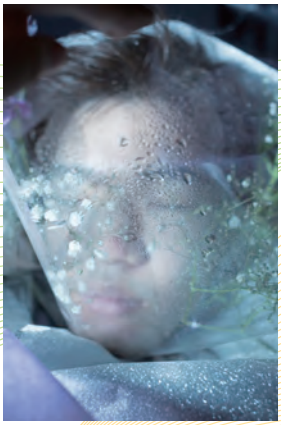
赤鹿 麻耶（あかしか まや）　日々のときめきを写真で描く

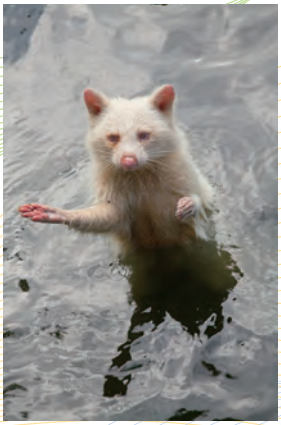
「写真を撮り始めて10年以上、日々の小さな興味やときめきの中から、自分が見てみたい景色を写真で描きたいという思いで続けてきました。私にとって写真は、それを展示することで場づくりをしたり、人とのコミュニケーションのきっかけにする素材に近い感覚があります。写真作品は壁に貼り付けて展示するというのが一般的ですが、私はこれまで空き地や銭湯などで展覧会をしてきた経験もあり、今回も多目的スペースという壁のない公共の場で、自分でイメージした空間づくりや実験的な展示を楽しんでいます。来場者には、ふらっと立ち寄って“ああ今日は良い体験ができたな”と思ってもらえれば嬉しいです」

プロフィール
1985年大阪府生まれ。2008年関西大学卒業、2010年ビジュアルアーツ大阪写真学科卒業。2011年作品《風を食べる》で第34回写真新世紀グランプリ受賞。大阪を拠点に海外を含む各地で個展、グループ展を開催。夢について語られた言葉、写真、絵や音楽など多様なイメージを共感覚的に行き来しながら、現実とファンタジーが混交する独自の物語世界を紡ぐ。主な展覧会に「あしたのひかり 日本の新進作家vol.17」（東京都写真美術館 ／東京・2020年）、「赤鹿麻耶写真展『ときめきのテレパシー』」（キヤノンギャラリー／東京・2021年）などがある。

《見えてないとおもった?》2021年

《人間以外》2021年


《花に触れないでください》2020年


《理解書店の店主 M》2017年

旅先での気づきを作品に昇華

展覧会では、多目的スペースに背の高い白い箱を置いて迷路のような空間を作り、そこに縦180cm×横120cmの大きな写真作品15点が展示されました。「一枚一枚に忘れられないエピソードがあり、それを数年にわたって考えている」という赤鹿さんは、旅先で感じたことを日本に帰って作品に昇華させることが多くあります。例えば《見えてないとおもった?》（2021年）（前掲左端）は、台湾で鳥の背後に近づいて撮影した瞬間、その鳥が撮影されているのを知っていたかのように赤鹿さんめがけて飛んできた体験から、それが鳥ではなく果物であれ何であれ、撮影者は被写体から見られているのではないかという気づきから生まれたもの。8月6日のアーティスト・トークでは、そうした数々のエピソードを交え、一枚一枚の作品に込めた思いが語られました。

作品解説をする赤鹿麻耶さん（2022年8月6日）

大阪中之島美術館 × 関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory
おおさか ディレクトリ

第２期　2022年11月23日（水・祝）～12月25日（日）

貴志（きし） 真生也（まおや）　多様性を発見する機会に

「美術作品にはあまり使用されないような素材を使ったり、組み合わせたりして、今までに見たことのない景色を作りたいと思っています。そして観ていただいた人に、刺激や好奇心を与えるきっかけになればいいですね。私の展示期間中、美術館では『ロートレックとミュシャ』展も開催しています。私とミュシャの作風は全く違いますが、同じ美術というフィールドで、同じ美術家だという多様性を発見してもらえれば嬉しいです。そのとき私の作品を見て困惑したり、あるいはネガティブな気持ちを持ったりしても、それによって生きているという実感を得てもらえればと思っています」

「ショーケース」2019年 展示風景
Courtesy of the artist and Kodama Gallery

プロフィール
1986年大阪府生まれ。2009年京都市立芸術大学彫刻専攻卒業。看板、建物、社会といった、人によってつくられた環境をモチーフとし、その意味を問い直す作品を制作している。発泡スチロール、角材、ブルーシートなどの工業資材を見立てによって作品とする。素材は規格そのままに、作家の手の痕跡を残さないよう意識され、不要な意味を排除したシンプルな形態へと落とし込まれている。主な展覧会に個展「リトルキャッスル」（児玉画廊／東京・2009年）、「バクロニム」（児玉画廊／東京・2010年）、「鼻向け」（Antenna Art Space／京都・2010年）、「またのぞき」（神戸アートビレッジセンター／兵庫・2014年）などがある。2011年にはメゾン・エルメスのウィンドウディスプレイを手がけた。

第３期　2023年1月20日（金）～2月26日（日）

遠藤（えんどう） 薫（かおり）　無意識の形に徹する

「工芸や民芸のクラフトに興味があり、特にその土地の歴史や生活の中で無意識に作られた形が気になっています。例えば、終戦直後の沖縄で米軍が捨てたコーラ瓶を溶かして再生利用する際、自然に入った気泡が原点となって生まれた「琉球泡ガラス」のようなものです。そのため作品を制作するときは、自分というものをできるだけ無くして、"たまたまこんな形になった" という自然さに徹しています。ご覧いただく方には、そうした行為そのものを目撃してもらえればと思っています。今回の展覧会では、沖縄で作っている舟を持ってこようかと考えています」

「閃光と落下傘」2020年 展示風景
撮影：デルフィン・パロディ
提供：青森公立大学 国際芸術センター青森（ACAC）

プロフィール
1989年大阪府生まれ。2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ（紬織、重要無形文化財保持者）主宰アルスシムラ卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて制作発表を続けている。主に雑巾や落下傘、船の帆などを制作し、「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマティブにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。近年の主な展示に「第13回 shiseido art egg」（資生堂ギャラリー／東京・2019年）、「Welcome, Stranger, to this Place」（東京藝術大学大学美術館／東京・2021年）、「琉球の横顔―描かれた『私』からの出発」（沖縄県立博物館・美術館／沖縄・2021年）などがある。「第13回 shiseido art egg」ではart egg賞を受賞。

大阪中之島美術館
大阪市北区中之島4-3-1 TEL.06-6479-0550
開館時間　10:00～17:00（ただし10月2日までは18:00閉館）
入場は閉館30分前まで　月曜休館（祝日の場合は翌平日）

アクセス
・京阪中之島線渡辺橋駅（2番出口）より徒歩約5分
・Osaka Metro四つ橋線肥後橋駅（4番出口）より徒歩約10分
・JR大阪環状線福島駅／東西線新福島駅（2番出口）より徒歩約10分
・阪神福島駅より徒歩約10分

学校アートプログラム　文化芸術による次世代育成事業

アーティストを学校に派遣して、継続的な体験授業を行う「学校アートプログラム」。関西・大阪21世紀協会が2021年度から取り組むこの事業は、子どもたちが仲間とともに創造する体験を通して人間力や思考力などを育むきっかけづくりを目的とし、大阪府泉南市・阪南市・岬町と各教育委員会とで連携協定を締結して実施しています。

当誌前号では、泉南市の実施小学校2校の校長に、プログラムを受けた子どもたちの変化や教師の方々の思いなどを伺いました。本号では、阪南市と岬町での実施のようすや評価委員による事業全体の評価結果などをご報告いたします。

阪南市立下荘（しもしょう）小学校 6 年生

教室に潜む形を使ったステンドガラス模様作り

講師：野原 万理絵（画家）

教室にあるもの（ランドセル、鉛筆、床のシミなど）をタブレット端末で撮影し、その形を使って、ステンドガラスの模様を作るプログラムです。クラス全員で集めた形をつなぎ合わせ、ひとつの大きなステンドガラスの壁面に仕上げました。

岬町立深日（ふけ）小学校 5 年生

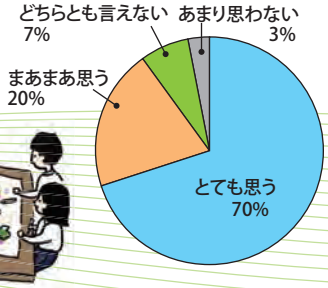
水平線から生まれるアニメーション作り（タブレット使用）

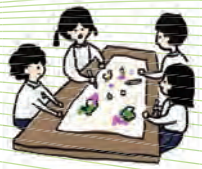
講師：林 勇気（映像作家）

1本の線から絵を展開させるアニメーションを一人一人が作り、その後、グループに分かれてどのようなストーリーにすればよいかを話し合い、それをつなぎ合わせて一つの作品に仕上げました。発表時には、身の周りにある音の鳴るものを使って、即興で効果音をつけました。

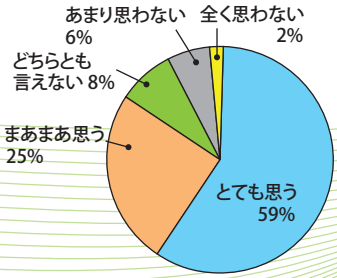
アンケート結果（全体）

「みんなが表現するのを見たり、聞いたりすることが楽しかった」

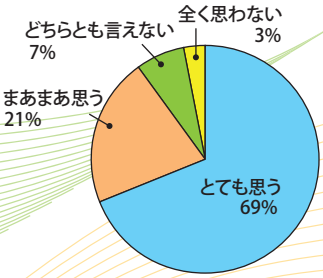




「みんなと力を合わせて取り組むことができて楽しかった」



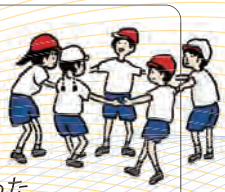
「またやってみたいと思った」



アンケートより抜粋

参加児童の感想

- みんなと協力して取り組めました。（実施する）前までは自分の感じた事などを表現するのは苦手だったけれど、この時間では感じた事を表現するのが楽しかったです。
- 今回のワークショップを体験して、図工が苦手だったけど、少しだけ得意になった気がした。
- みんなの作った作品を見て、たくさんの工夫を見つけることができたのでとても楽しかったし、今まで体験したことのないことを体験できたのでたくさんの発見ができたと思いました。



教員の感想

- どの作品も評価してもらえたのがよかった。
- おとなしい児童の意外な一面が見られた。
- アーティストの児童との接し方に触れることによって、教員自身も新しい発見があった。
- 自らが新しい芸術表現を知るきっかけになった。

評価委員評価結果

1. 児童の成長に繋がるプログラムであるか？

- どのプログラムも他者と関わりが持てるものになっている。協働で制作し、発表の機会も設けられたことで、他者と共感できる場が作られていた。
- アーティストと出会うことで、日常のさまざまなことをよく観察して多面的に捉えられる一助となる。
- 普段と違う授業を体験することが、表現することの楽しさを味わわせ、創造することへの興味につながっている。

2. 提供プログラムとしての評価

- 授業で普段しないことを経験することで、友だちの違う一面や良さに気づけている。
- アーティスト、担任教員、スタッフとみんなが協働して肯定的に進めていることで、蚊帳の外になる子どもがおらず、自己肯定感や他者理解につながっている。
- アンケートの自由記述で多く感想を書いているのは珍しく、プログラムへの満足感がうかがえる。